

●原発見学

昨年、フィリピン・ルソン島の西海岸にあるバターン原発を見学する機会を得た。バターン原発はエネルギーショックを機に1976年に建設が開始されたが、スリーマイルやチェルノブイリの原発事故後の反原発世論の高まりなどを受け、一度も稼働することなく1986年に廃止となった。現在は世界で唯一内部まで見学できる原発として世界各国から見学者を受け入れており、日本からの見学者も多数受け入れてきているとのことである。1時間以上に及ぶバターン原発の概要及び原子力発電に関する講義の後、原発内への見学がスタートした。巨大なタービンや発電機、中央制御室を見学後、ニュースでもよく耳にする“格納容器”に入り“制御棒”を実際に見たときはなかなか感慨深いものがあった。

日本では先の震災以来、将来の原子力政策が大きな議論となっている。見学を通して原発を安全と思うか危険と思うか、原発は必要か否かの考えは人それぞれだと思うが、少なくともその存在意義について考えるきっかけにはなった。バターン原発の見学は事前予約が必須だが個人での見学も可能である。しかし施設維持費が莫大で取り壊されるとの話もある。見学希望の方はお早めに。

岡村 誠（海外室）

●ゆるキャラ新時代

かつてみうらじゅん氏（漫画家・イラストレーター）は、いみじくも名づけた「ゆるキャラ」の要件として、「郷土愛に満ち溢れた強いメッセージ性」「立ち居振る舞いの不安定さ・ユニークさ」「愛すべき“ゆるさ”」の3つをあげています。イメージとしては、（愛ゆえに）ご当地自慢を盛り込み過ぎて、（シロウトゆえに）説明されないと何がなんだか分からない、（ひたむきさゆえに）微笑ましく、（注目されたいがゆえに）突っ込みどころ満載となった「憎めないキャラ」といったところでしょうか。

かの「ひこにゃん」以降、地域や自治体でマスコットと云えば、もれなく「ゆるキャラ」といったご時世ですが、公募による一般人のデザインにより制作費がかかからない、ビジュアル的にメディアに乗りやすく訴求力がある、ネットやクチコミがおもな媒体なので宣伝費をかけずに高い認知度が得られる、などともはやされ、公共機関や制度等のPRキャラなども含めると優に1500は超えると思われています。これまたB級グルメ同様、泡沫キャラも数知れず、先の裁判員制度導入時など全国の検察・裁判所関係で60以上ものキャラが乱立する騒ぎに発展。ことここに至って淘汰は必至と、ゆるキャラ界も費用対効果をにらみつつ、資本もしかるべく投下してじっくり育成していこうという流れのようです。

さて、そこに真打ち登場の声ありなのが、熊本県の「くまモン」。まごうかたなき「ゆるキャラ」ぶりながら、その「ゆるさ」にはどこか風格すら漂い、ためつすがめつも愛らしさにスキがない。それもそのはずで、仕掛け人は放送作家の小山薫堂氏、キャラクターデザインは水野学氏。…とくれば「それってもうゆるキャラじゃ無いのでは？」と云われそうですが、確かにくまモンは、地元天草出身の小山氏の押しかけ提案から始まったもので、プロモーションのほとんども県のブランド推進課が担う、いわば「プロのゆるキャラ」。認知までのストーリーも本格的で、例えば九州新幹線の開業をにらんだ関西圏でのPRでは、まずSNSやネットで仕掛けておいて、街なかにランダムに出没させ、目撃クチコミが盛り上がったところで一気に大量のポスター展開（50種類）、素性を明かしてマス媒体へと、プロ顔負けの周到さ。運用でも、商標権を県が買取り、使用料を無料にするなど思い切りもよく、熊本県のブランド力向上に寄与すると判断されれば、県外からでも使用許諾OKと太っ腹、すでに申請件数は7千件を超えたもようです。

郷土愛に溢れたサポーターも味方に、単なる経済効果を越えて県のブランド力を支えるまでになったゆるキャラ「くまモン」。先ごろ臨時職員から知事直轄の営業部長に昇進した模様で、ますますのご盛栄ぶりです。

山田 順造（デザイン室）

発行責任者：代表取締役 庄山 高司
事務局：株式会社アルメック 業務部
東京都目黒区青葉台 1-19-14
電話 03-5489-3211・FAX 03-5489-3210
Eメール hotnews@almec.co.jp
ホームページ <http://www.almec.co.jp/>

Copyright 2013 ALMEC Corporation. All rights reserved.